

『正法眼蔵』「身心学道」の一考察

神 戸 信 寅

はじめに

『正法眼蔵』「身心学道」の巻は、その奥書に、

爾時仁治三年壬寅重陽日在于法林寺示衆仁治癸卯春初

二日書写 懷辨

とある。一二四二年九月九日、道元禪師（以下、禪師）四十三歳の時、法林寺において示衆し、それを懷辨が一二四三年二月二日書写している。禪師が「身心学道」を示衆した仁治三年の三月には『正法眼蔵』「坐禅箴」が興聖寺において記され、四月には「行持」の巻を書いている。

ところで、この「坐禅箴」では、葉山惟儼（七四五―八二八）の「思量箇不思量低」という有名な語句を挙げ、

『正法眼蔵』「身心学道」の一考察（神戸）

「不思量低を思量するには、かならず非思量をもちゐるなり」^①とし、「学道のさだまれる参究には、坐禅弃道するなり」^②とある。「非思量」は「坐禅弃道することである」という。続いて、南岳懷讓（六七七―七四四）と馬祖道一（七〇九―七八八）における「坐禅箇箇什麼」の問答を提示して、「しるべし、大寂（馬祖道一）の道は、坐禅かならず図作仏なり、坐禅かならず作仏の図なり」といひ、「打坐時にあり、打坐人にあり、打坐仏にあり、学坐仏にあり」^④といている。葉山の坐禅弃道における「非思量」は、南岳と馬祖の問答においては具体的に、「打坐時に「打坐人〓打坐仏」という坐禅であること、即ち生仏一如の「坐仏」であることとしている。そして、『正法眼蔵』

「坐禅箴」の最後に禅師は、古来より近代に至るまで坐禅儀、坐禅銘、坐禅箴を撰せる老宿はあるが、共に取るべきところなく、あわれむべしと言っている。その中で、黙照の宗風を挙揚した宏智正覚（一〇九一—一一五七）の「坐禅箴」のみが、「ひとり法界の表裏に光明なり、古今の仏祖に仏祖なり」として、禅師みずからそれにならって「坐禅箴」を撰している。このように、禅師は、この『正法眼蔵』「坐禅箴」において、坐禅が仏祖の坐禅として、本来あるべき本質的な在り方、仏祖の世界とも言うべき所を述べている^⑥。また、この年の四月には「行持」の巻を書き、仏祖の「無上の行持」をすることにより、断絶なき「行持道環」する仏祖とわれらの「行持」という面に焦点を当てて説示する^⑦。これに対して『正法眼蔵』「身心学道」の巻は、「身心」という我々自身の「人体」という主體的な面から「学道」が説かれているといえる。そこで、まず「身心学道」の巻における「学道」は、どのようなものであるかの考察を試みることにする。

「学道」について

禅師は「学道の本基」について、
修行仏道者、先須信仏道。信仏道者、須信自己本在道中、不迷惑、不妄想、不顛倒、無増減、無悞謬也。生如是信、明如是道、依而行之。乃学道之本基也。（仏道を修行する者は、先ず須く仏道を信ずべし。仏道を信ずる者は、須く自己道中に在って、迷惑せず、妄想せず、顛倒せず、増減なく、悞謬なきことを信ずべし。かくの如き信を生じ、かくの如き道を明きらめ、依りてこれを行す。乃ち学道の本基なり。）^⑧

とあるように、学道の主体である自己が先ず仏道の中にあつて、迷惑もせず、妄想もせず、顛倒もなく、増減もなく、悞謬もないということ。道中にあつての「学道」であるということを信ずることが「学道の本基」であるとしている。そして、この仏道の中で学道するということは、
仏道は、不道を擬するに不得なり、不学を擬するに転遠なり。南岳大慧禅師いはく、「修証はなきに転ず、汚染することえじ」（「身心学道」一二七頁）。

というように、不汚染の仏道において学道することである。仏道において学道することは、仏道の世界で「身心一如」をもってする学道である。この学道は、云うまでもなく仏道の世界にあつての「学道」であるから、仏道を外れようとしても外れようがない。しかし、仏道世界の学道だからといって、学道しなければ仏道世界とは疎遠となり、「身心学道」としての学道にはないことになる。只、仏道

の世界にあるということとは、「身心一如」としての「学道」であるということである。また、仏道の世界にないということとは、仏道における学道とはならず、「仏道を学せざれば、すなわち外道・闍提等の道に墮在す」ということとなる。外道や闍提等の道に落ちてゐる学道であつて、仏道の世界にある学道とはいえない。このことは、前仏も後仏も仏祖たるものの学道は皆、仏道の世界にあつて学道していたということである。

それでは、外道や闍提等の道に落ちることなく仏祖の学道が行じられてゐる仏道の世界は、どのような世界であるかといへば、「仏道はなんぢが仏道にあらず、諸仏祖の仏道なり、仏道の仏道なり」といい、「仏道はただ仏仏の究

『正法眼蔵』「身心学道」の一考察(神戸)

尽にして仏仏にあらざる時節あらず」といつている。このことは、「身心学道」が我々の凡夫としての身体をもつての学道ではなく、諸仏の学道であり、仏仏の究尽する学道であるということである。それでは、このような「諸仏の学道」であるためには、どのような心がけを、先ず、すべきであるかといへば、禪師は、

参禅学道は第一有道心、これ学道のはじめなり。¹¹⁾

といい、『学道用心集』にも、「可発菩提心事(菩提心を発すべき事)」が説かれているように、仏道を求める心が、先ず求められており、学道のはじめであるとしている。その他、諸仏の学道に求められるものとして、

学道者不可用思量分別等之事、常带思量等以吾身而檢点、於是明鑑者也(学道は思量分別等を用いるべからず、常に思量等を帯び吾が身をもって檢点せば、ここにおいて明鑑なるものなり)¹²⁾

と、思量分別等を用いないこと、自我意識が入り込まないこと、我見我執に落ち入らないことである。また、『学道用心集』に「参禅学道は正師を求むる事」とあるように、行解相応する正師の存在が重要であること。更に、

『正法眼蔵』「身心学道」の一考察（神戸）

大凡信自己在仏道之人最難得也。若正信在道、自然了大道之通塞、知迷悟之職由也（大凡自己仏道に在りと信ずるの人最も得難し。もし正しく道に在りと信ぜざれば、自然に大道の通塞を了じ、迷悟の職由を知らん）。¹³と、「正しく道に在りと信ずる」こと等が述べられている。

ところで、「諸仏の学道」である「身心学道」を、禪師は仮に「心をもて学す」の面からと、「身をもて学す」の面からとに分けて説示しているので、先ず「心をもて学す」学道について窺うこととしたい。

心学道

この「身心学道」の「身心」について、「弁道話」において禪師は、

しるべし、仏法にはもとより身心一如にして、性相不二なりと談ずる、西天東地おなじくしれるところ、あへてたがふべからず。いはむや常住を談ずる門には万法みな常住なり、身と心とをわくことなし。寂滅を談ずる門には諸法みな寂滅なり。性と相とをわくことなし。

し。¹⁴

と述べている。仏法ではもととも身心一如であることに背いてはならない。常住は常住であり、寂滅は寂滅であつて、身と心とを別々に分けることは出来ないと言べている。身心一如、性相不二である。このことは、仏法の談ずるところであるという。

しかし、言葉や文字の上では、身心というように身と心との言葉がある。身心を別々に切り離すことは出来ないが、紙の表裏のように心の面と身の面とに分けて云うことはできる。そこで、禪師も仏道を参学する「身心学道」を、心の方面からと身の方面から「しばらくふたつあり」として、「心をもて学し、身をもて学すなり」と説いている。即ち、

仏道を学習するに、しばらくふたつあり、いはゆる心をもて学し、身をもて学すなり。¹⁵

という。仏道の学習として、「しばらくふたつあり」として、その一つは「心をもて学すこと」であり、もう一つは「身をもて学すこと」であるとしている。しかし、「仏道を学習する」心と身とが、仏道の道中で学する身心一如の

「心学道」と「身学道」であるためには、心と身とが相対的なものでなく身心一如に徹して「心をもて学し、身をもて学す」ことでなければならぬ。身心のどちらかに執られて学すとなれば、不汚染の仏道とはならず、「すなわち外道・闍提等の道に墮在す」（二二七頁）ことになり、「身心一如」の「心学道」とはいえない。

このことは、「仏道を学習する」という「学習」は、単なる学習ではないはずである。そこで、世間一般において「学習」という言葉は、どのような意味かを『広辞苑』に見てみると、「過去の経験の上に立って新しい知識を意識的に習得すること。技能・知識を意識的に習得すること」とある。いわゆる新しい技能・知識を意識的に「習い会得する」ことである。しかし、ここでの「学習」は、仏道の中での学習であるから、既に、会得の上での学習である。それ故、「心をもて学す」は仏道の中で「身心学道」そのものとしての「学道」であり、「身心一如の学道」を本源とし、「身心一如の学道」を背負い、「心学道」の面において「心をもて学す」ことである。換言すれば、「身心一如の学道」において「身心」を「し、ば、ら、く、ふ、た、つ」にわけ

『正法眼蔵』「身心学道」の一考察（神戸）

て、先ず、「心」の方に目を向けて「心をもて学する」のである。このことからすれば、「仏道を学習する」ことにおいての「学習」は、仏道の本源そのものに「参学」する「学」と、本源を「習得」する「習」とを両翼とした「心学道」であるといえる。このことは、「身心一如の学道」の「学道」は、文字どおり仏道の本源そのものに「参学」する「学」としての意味合いのみが強いといえよう。

そこで、まず「心学道」の方面での「習得」には、如何なる学び方があるかといえ、

心をもて学するとは、あらゆる諸心をもて学するなり。その諸心といふは、質多心・汗栗駄心・矣栗駄心等なり。（身心学道 一一二八頁）

と、幾つかの諸心を挙げてゐる。その内、「質多心」については、

感応道交して、菩提心をおこしてのち、仏祖の大道に帰依し、発菩提心の行李を習学するなり。たとひまだ真実の菩提心おこらずといふとも、さきに菩提心をおこせりし仏祖の法をならふべし。（身心学道 一一二八頁）

と、「仏祖の大道に帰依し、発菩提心の行李を習学するなり」という。しかし、たとい「真実の菩提心」がおこらなくとも、「仏祖の法を」ならない仏道を習得していくことが、仏道の世界に参学することになるといっているのである。

ところで、質多心・汗栗駄心・矣栗駄心といった諸心について、『正法眼蔵』「発菩提心」に、

おほよそ、心三種あり。一者質多心、此方称慮知心。

二者汗栗多心、此方称草木心。三者矣栗多心、此方称積聚要心（一には質多心、此の方に慮知心と称す。二には汗栗多心、此の方に草木心と称す。三には矣栗多心、此の方に称積聚要心と称す）。

とあり、慮知心と称される質多心について、

このなかに、菩提心をおこすこと、かならず慮知心をもちゐる。……この慮知心をすなわち菩提心とするにはあらず、この慮知心をもて菩提心をおこすなり。

といい、仏道に入る為に最も大切な「発菩提心」は、

感応道交するところに、発菩提心するなり。諸仏菩薩の所授にあらず、みずからが所能にあらず、感応道交するに発心する、ゆゑに自然にあらず。¹⁶⁾

とある。「仏道を学習する」には、禅師の『学道用心集』にもあるように、先ず「菩提心を発すべき事」が基本である。それには「この慮知心をすなわち菩提心とするにはあらず、この慮知心をもて菩提心をおこすなり」の慮知心である質多心をもつて感応道交するところに発菩提心するのである。この慮知心がすなわち菩提心ではなくても、先に菩提心を発していた仏祖の法をならい「習得」していくことにより感応道交し、「発菩提心」となり、先に菩提心を発していた仏祖からの「菩提心発」となる。

しかし、一方において禅師は、

これらの心を放下して学道するあり、拈挙して学道するあり。このとき、思量して学道す、不思量して学道す。（「身心学道」一二八頁）

という。我々の発す諸心は、我見我執に汚染されているのが現実である。そこで、「菩提心をおこすこと、かならず慮知心をもちゐる」といわれた慮知心をも放下し、直下に「身心一如」にて「菩提心」に承当して、仏道を参学する「身心学道」の「学道」があるとす。いわば、菩提心を起こすとされる、思慮分別の慮知心に代表される「諸心」

をも、すべて放下した処に、仏祖の思量なる身心一如の学道があり、思慮分別の及ばない不思議なる学道があるという。

しかも、ここでの「身心学道」の心の側には、仏祖と感応道交し、「発菩提心の行李を習学」している「あらゆる諸心」による「心学道」があるといえよう。

そこで、「あらゆる諸心」における「汗栗多心」については、「汗栗多心、此の方に草木心と称す」とあるように、釈尊の正法が、

あるいは金襴衣を正伝し、金襴衣を稟受す。あるいは汝得吾随あり、三拝依位而立あり。碓米伝衣する、依心学心なり。(「身心学道」一二八頁)

と、仏祖から仏祖へと正伝してきた歴史上の故事に窺うことができる。即ち、釈尊と摩訶迦葉との「金襴衣」、達磨と二祖慧可との「三拝依位而立」、五祖弘忍と六祖慧能との「伝衣」といった具体的なものに、単なる物でなく心の通った「金襴衣を稟受す」ということに、「汝得吾随あり、三拝依位而立」という無心なる動作に、「碓米伝衣する、依心学心なり」と事物により示された「心学道」が

『正法眼蔵』「身心学道」の一考察(神戸)

述べられている。

また、諸心のうち「矣栗多心」については、「此の方に称積聚要心と称す」というものである。即ち、多く集まったもののうちで肝心要となる「積聚要心」については、

剃髮染衣、すなはち回心なり、明心なり。踰城し入山する、出一心、入一心なり。山の所入なる、思量箇不思量底なり。世の所捨なる、非思量なり。(「身心学道」一二八頁)

により知ることが出来る。いわゆる「要」となるのが、釈尊が剃髮染衣して出家して、心を仏道に回らしたことであり、心を明らかにすることである。出城して山にはいつたのは、凡夫根性の心を抛出して仏祖の心を学ぶ世界に入ることである。仏道の山に入るということは、仏祖の思量のみで凡夫の思量は不思議である。この身体は剃髮染衣して出家し、心も仏道に回らし、身心共に全てが仏道の世界に入ることである。世俗を捨て、「仏道を学習する」ことは、凡夫の思量を離れた非思量の処に心をおくことである。そして、この非思量の処にあることは、

これを眼睛に団じきたること二三斛、これを業識に弄

『正法眼蔵』「身心学道」の一考察（神戸）

しきたること千万端なり。かくのごとく学道するに、有功に賞おのづからきたり、有賞に功いまだいたらざれども、ひそかに仏祖の鼻孔をかりて出氣せしめ、驢馬の蹄を拈じて印証せしむる、すなわち万古の榜樣なり。（「身心学道」一一九頁）

と、仏道において仏祖は全てが仏祖の眼睛となり限りなく学道し、凡夫は業識に果てしなく弄せられるという。それでも、「仏祖の鼻孔をかりて出氣せしめ、驢馬の蹄を拈じて印証せむる」というように、非思量処に在るべく行ずることが、やがて仏祖の学道となるという。仏祖の鼻孔をならい、世を所捨した非思量処の仏祖の世界での学道は、万古に変わらぬ学道の標準であるとしている。

このことは、先に仏道を学ぶ心を発すには、「菩提心を発す事」が第一であり、しかも「たとひいまだ真実の菩提心おこらずといふとも、さきに菩提心をおこせりし仏祖の法をならふべし」とも述べていたように、菩提心を発し、釈尊の蹤跡や達磨の坐禪修行のように、身も心も共に「仏祖の法をならふ」ということが、最も仏道の世界における学道の本質に叶ったものといえることができる。

それでは、「真実の菩提心」とは何か、

発菩提心なり、赤心片々なり、古仏心なり、平常心なり、三界一心なり。（「身心学道」一二八頁）

とある。このうち「発菩提心なり」の心について、

「発菩提心」は、あるいは生死にしてこれをうることあり、あるいは涅槃にしてこれをうることあり、あるいは生死涅槃のほかにしてうることあり。ところをまつにあらざれども、発心のところにさへられざるあり。境発にあらざり、智発にあらざり、菩提心発なり、発菩提心なり。（「身心学道」一三一頁）

と述べている。菩提心を発し菩提心を得るのは、迷いの生死の中でも、悟りの涅槃の中でも、生死涅槃をほかにしても得る事があるという。このように、時処を期待するのではなく、時処に妨げられるでもない。それかといって、環境によつても、智慧によつてもない。ただ、「菩提心発なり、発菩提心なり」と、菩提心自体によつて発されるのだという。それでは、この発菩提心自体の内容はどのようなものかといえば、

発菩提心は、有にあらざり無にあらざり、善にあらざり悪に

あらず、無記にあらず。報地によりて縁起するにあらず。天有情はさだめてうべからざるにあらず。たゞまさに時節とともに発菩提心するなり。(『身心学道』一三二頁)

といつている。発菩提心自体に対して、「……あらず」「……あらず」といつているように、内容を実体的に特定し評価することが出来ないもの。ただ「時節とともに発菩提心するなり」である。菩提心を発す正にその時節に、環境や智慧にかかわらず全法界がごとごとく発菩提心として、法界に充滿し遍在しているのである。

また、その心は、「赤心片々なり」といつている。この「赤心片々なり」とはどんな心なのかといえ、

「赤心片々」といふは、片々なるはみな赤心なり。一片両片にあらず、片々なるなり。

荷葉団々団似鏡、菱角尖々尖似錐(荷葉団々、団なること鏡に似たり、菱角尖々、尖なること錐に似たり。)かゞみににたりといふとも片々なり。錐ににたりといふとも片々なり。(『身心学道』一三二頁)

と、ここでは、全法界に充滿し遍在する心が、赤心なる一

『正法眼蔵』「身心学道」の一考察(神戸)

片一片としてある在り方を示しているといえよう。ここでいう「赤心片々」について『御抄』は、

赤心とはあらはなる心なり、解脱の心地也、心の無辺際なる道理、一法究尽の理を如此云也、一片とも両片とも難定、只片々なり。¹⁷⁾

という。このことからして、赤心片々というのは、一片一片に全現する様相がみな全法界の「あらはなる心」である。それ故、「二片とも両片とも定めがたく」、只一片一片の全現である。「荷葉団々団似鏡、云々」は、『御抄』に、

荷葉は、団々としてまるにて法界を尽く、菱角は尖々としてするどくして法界を尽す心地也、不交余法心地也、円ならば尽十方円、菱角ならば尽界菱なる義なり、詞はかはれども究尽の理は同じかるべし、ゆえにかゞみに似たれども片々とは云也。¹⁸⁾

という。蓮の葉がまるければ尽十方界円として法界を尽くし、菱の葉の角が尖つて鋭ければ尽十方界が尖つた菱の全現である。それ故、「かゞみににたりといふとも片々なり。錐ににたりといふとも片々なり」で、詞は変われども、究尽の理は同じであり、蓮の葉は蓮の葉で、菱角は菱

角で、それぞれ一片一片として究尽の理において全現していることになる。

次の「古仏心なり」の心についても、

「古仏心」といふは、むかし僧ありて大証国師にとふ、「いかにあらむかこれ古仏心」。

ときに国師いはく、「牆壁瓦礫」。

しかあればしるべし、古仏心は牆壁瓦礫ならず、牆壁瓦礫を古仏心といふにあらず、古仏心それかくのごとく学すなり。（「身心学道」一三三頁）

と述べている。『御抄』に「牆壁瓦礫の究尽する時、古仏心といはじ、古仏心の独立する時牆壁瓦礫といはじと云心地也、是則一法独立の姿なり」で、「究尽する時」、古仏心の時は古仏心のみ、牆壁瓦礫の時は牆壁瓦礫のみであつて、古仏心と牆壁瓦礫とは相對しているのではなく一如不二である。

更に、古仏心について、『正法眼蔵』「仏向上事」には、
仏道をならはんとをもち、はじめより古仏の心をあきらむるを、心を以て学道するとは云うべし。自こころはいたづらに知見解会にほこりて、ひとゑに思量分別

のみあり。釈迦老子云、是法非思量分別之所能解（この法は思量分別のよく解する所に非ず）と。はかりしるべし、みづからにはとるべき心なし、古仏には習うべき心あり。¹⁹⁾

と、古仏心は、古仏の心を明らかにすることであつて、自らの思量分別による心は知見解会にわたるもので、とるべきものは一つもないという。そして、その古仏の心を「証せんとするに、牆壁瓦礫の見成するあり」と、相對を絶し、具體的に在るがままの牆壁瓦礫そのものの全現である。まことに、

七仏以前に古仏心壁豎す、七仏以後に古仏心才生す、諸仏以前に古仏心花開す、諸仏以後に古仏心結果す、古仏心以前に古仏心脱落なり。²⁰⁾

と、古仏心は遠く過去七仏以前からの真理であつて、諸仏の修行する処である。それが、過去七仏以後釈尊の出現によつて、ようやく古仏心が現前し、古仏心が諸仏の学道として実を結んだのである。もともと古仏心そのものは知覚分別を越えたものであり、脱落したものであり、脱落の古仏心であるという。

また、「平常心なり」の心についても、

「平常心」といふは、此世界といはず、平常心なり。昔日はこのところよりさり、今日はこのところよりきたる。さるときは漫天さり、きたるときは尽地きたる。これ平常心なり。平常心この屋裏に開閉す、千門万戸一時開閉なるゆゑに平常なり。(「身心学道」一

三三頁)

と述べている。ここでいう「平常心」は、この世界、他の世界という区別はなく、尽十方界ごとくが平常心であり、「昔日はこのところよりさり、今日はこのところよりきたる」というように、天地いっばいの平常心の中にあつて昔と今日とが去来している。それ故、去るときは天地の全体が去り、来るときは天地の全体が来ることであつて、天地いっばいの平常心に変わりはない。平常心は尽天地そのものであり、その平常心の中での去来開閉であつて、増減があるのでなく、無数の現象が平常心として、同時に去来生滅しているものである。いわば、平常心は広大無辺な仏祖の平常心であつて、吾我に執われ相对化された凡夫の平常心ではない。

『正法眼蔵』「身心学道」の一考察(神戸)

このように、本来の平常心は、

いまこの蓋天蓋地は、おぼえざることばのごとし、噴地の一声のごとし、語等なり、心等なり、法等なり。寿行生滅の刹那に生滅するあれども、最後身よりさきはかつてしらず。しらざれども、発心すれば、かならず菩提の道にすゝむなり。(「身心学道」一三四頁)

で、広大無辺で天地全体としての平常心は、意識以前の所から何の混じりけもなく噴き出す一声の如くである。いわゆる、仏道における平常心は、日常の言葉も心も法も、等しく意識という兆しの現れる以前の心というのであるから、知ることはできないのである。しかし、広く開かれた仏道は、発心すれば必ず菩提の道に進むことができるのである。否、発心すれば既に仏道の中にあつての学道である。

ところで、赤心、古仏心、平常心等の諸心の「心」は、「仏道を学習する」心であり、「身心一如」の心である。それを、「身心一如の学道」から外れた「心」と「身」とに切り離し、「いわゆる心をもて学し」となると、それは「身心一如」の心学道ではなく、外道の心学道となる。仏

道での「心学道」は、仏道の真つ只中での学道、身心を両翼とし両輪とした「心学道」である。しかし、一方究尽の「心」の側からすれば、全法界は心そのものであり、「三界唯一心」ということになる。いわゆる、

三界唯一心、心外無別法、心仏及衆生、是三無差別
（三界は唯だ一心のみ、心の外に別の法なし、心・仏及び衆生、是の三は差別なし）²¹

と、仏道の道中における学道は、「心・仏及び衆生」に差別はなく一体である。このことは、「心もて学す」となれば、心の外に別の法はなく、三界全てが心そのものである。仏・衆生となれば、三界全てが仏であり衆生であることとなる。

心と自然界の事象

ところが、「三界唯一心」としてしめされた「心」は、抽象的な「心」ではなく具体的に、

しばらく山河大地日月星辰、これ心なり（「身心学道」一二九頁）

と述べられている。具体的な山河大地日月星辰といった自

自然界の事象が、「心」であるとして示している。身心一如の「仏道を学習するに」「心をもて学す」ことは、心が山河大地日月星辰であり、日月星辰が心であると、仏道での「心学道」では、一体となり具体的に示される。抽象的な心ではなく、山河大地日月星辰である。即ち、「山河大地日月星辰、これ心なり」である。そして、更に個々の「山河大地」について、「山」は、

山もおほかるへし、大須弥小須弥あり。横に処せるあり。豎に処せるあり。三千世界あり、無量国あり。色にかゝるあり、空にかゝるあり。（「身心学道」一二九頁）

と、山といっても大小の山、横に広い山、縦にそびえ立つ山もある。また、あらゆる世界、無数の国にもあれば、形のあるもの、形を越えた山々もあると、一体ではあっても山は千差万別、それぞれ在るがままに山を示しているのである。また、「河」についても、

河もさらにおほかるべし、天河あり、地河あり、四大河あり、無熱池あり。北俱盧洲には四阿耨達池あり。海あり、池あり。（「身心学道」一二九頁）

天上の河、地上の河もあれば、耨達池から流れ出ている四大河もある。更に、その源の無熱池もある。また、北俱盧洲には清冷の水を出す四つの阿耨達池がある。そのほか海も池もあると、河も一様ではないという。「大地」についても、

地はかならずしも土にあらず、土かならずしも地にあらず。土地もあるべし、心地もあるべし、宝地もあるべし。万般なりといふとも、地なかるべからず、空を地とせる世界もあるべきなり。(「身心学道」一二九頁)

『私記』に「地といへば土なるべしとのみおもへる情識をはらふ語なり」というように、大地は必ずしも国土だけでも、国土も必ずしも大地だけではなく、土地も心地も宝地もあるべしで、大地の大小や形の有無等さまざまではある。しかし、大地はないわけではなく、鳥のように空を大地とする世界もあるべきとしている。

このように、心を山河大地としているのであるが、この山河大地は固定化され実体化された山河大地ではなく、様々な山河大地であり、「情識」を離れたものとしてある

『正法眼蔵』「身心学道」の一考察(神戸)

がままに一瞬一瞬に具現している。「山水経」の「やまこれやまといふにあらず、山これやまといふなり」の言葉を借りれば、「山河大地これ山河大地といふにあらず、山河大地これ山河大地といふなり」と、先入観や執われを離れた在るがままに、「山河大地日月星辰、これ心なり」ということになる。また、「山河大地日月星辰」の「日月星辰」についても、

日月星辰は人天の所見不同あるべし、諸類の所見おなじからず。恁麼なるがゆゑに、一心の所見、これ一齊なるなり。これらすでに心なり。(「身心学道」一三〇頁)

と、述べている。人間界と天上界とでは、所見が同じではない。諸類の所見も同じではない。そうであるが故に、「山河大地日月星辰、これ心なり」とする心においては、その見るところは全て「心」として同一である。そこで、このような心は、どのように示されているかといえは、

向來はこれたゞこれ心の一念二念なり。一念二念は一山河大地なり、二山河大地なり。山河大地等、これ有無にあらざれば大小にあらず、得不得にあらず、識不

『正法眼蔵』「身心学道」の一考察（神戸）

識にあらず、通不通にあらず、悟不悟にあらず。

かくのごとくのみみづから学道することを慣習するを、心学道といふと決定信受すべし。（「身心学道」一

三〇頁）

今まで述べてきた「心」は、一念二念のことであるという。一念二念が心学道であり、心をもて「仏道を学習する」ことである。そして、この一念二念に全現する山河大地は、比べたり対象化されるものでないから、有でも無でもなく、大小でもない。また、得られるとか得られないとか、識るとか識られないとかでもない。更に、通ずるとか通じないでもない、悟るとか悟らないとかというも変わりのない。要するに、心の一念二念・去来生滅に山河大地が全一に去来生滅しているといえる。その意味で「山河大地日月星辰、これ心なり」である。心をもつて学する「心学道」は、山河大地自体からすれば、山河大地をもつて学する学道である。我々の前に現成している山河大地は、単なる山河大地ではなく、心をもつて「仏道を学習する」具体的な「心学道」を示したものである。具体的な山河大地日月星辰と心とが一体となつて、心自ら山河大地日月星辰に

成りきつて行く学道を習慣にする、そのこと自体が「心をもて学する」ところの「心学道」であると決定して信受すべきとしている。

身学道

それでは、「仏道を学習する」に「身をもて学する」という「身学道」について、禅師はどのように述べているであろうか。

身学道といふは、身にて学道するなり。赤肉団の学道なり。身は学道よりきたり、学道よりきたれるは、ともに身なり。尽十方界是箇真実人体なり、生死去来真実人体なり。この身体をめぐらして、十悪をはなれ、八戒をたもち、三宝に帰依して捨家出家する、真実の学道なり。このゆゑに真実人体といふ。後学かならず自然見の外道に同ずることなかれ。（「身心学道」（「身心学道」一三四頁）

身学道は身をもつて学道することであり、生身の身体の学道である。身をもつて「仏道を学習する」身体は、「身心一如の学道」からきているのであり、「身心一如の学

道」からきているのは身体である。即ち、「尽十方界是箇眞実人体」である。この「尽十方界是箇眞実人体」における身体は、仏道の中で「身学道」として十方世界を究尽している「眞実人体」であり、生死去来する生身の身体である。この生身の身体である「眞実身体」をめぐらして、十悪を離れ、八戒を保ち、三宝に帰依し、そして、捨家出家することが「眞実の学道」である。眞実の学道によってこそ眞実人体となる。眞実の学道を抜きにして眞実人体はないので、後学のものはず、自然見の外道に墮することがあつては成らないという。ここにおいて、「眞実人体」というのは仏道の中で「眞実の学道」としての「身心学道」が「身学道」の方面において全機現していることである。なかでも、「身心学道」における「身学道」は、出家・在家のうちでも「三宝に帰依して捨家出家」しての「身学道」というように、出家の身に重きがおかれていることは注目にあたいる。

ところで、「身学道」における眞実人体は「尽十方界是箇眞実人体なり」というように、「尽十方界」そのものである。そこで、「尽十方界是箇眞実人体」としての「尽十

『正法眼蔵』「身心学道」の一考察（神戸）

方界」は、どのようなものかといえば、

「尽十方世界」といふは、十方面ともに尽界なり。東西南北四維上下を十方といふ。かの表裏縦横の究尽なる時節を思量すべし。思量するといふは、人体はたとひ自他に罣礙せらるるといふとも、尽十方なりと諦觀し、決定するなり。これ未曾聞をきくなり。方等なるゆゑに。界等なるゆゑに。「人体」は四大五蘊なり、大塵ともに凡夫の究尽するところにあらず、聖者の参究するところなり。又、一塵に十方を諦觀すべし、十方は一塵に囊括するにあらず。あるいは一塵に僧堂・仏殿を建立し、あるいは僧堂・仏殿に尽界を建立せり。これより建立せり、建立これよりなれり。恚麼の道理、すなはち尽十方界眞実人体なり。自然天然の邪見をならふべからず。（「身心学道」一三五頁）

「身心学道」における「眞実人体」は、全世界としての尽十方世界である。この尽十方世界というのは、東西南北・四維・上下を究尽している十方面である。その十方の表裏縦横を究尽している時節を思量すべきであるという。どのように思量すべきかという、人体はたとい自他に区

別されるけれども、區別以前の眞実人体は尽十方界であると諦観し決定することであるという。人体と十方界とは相對しているようであつても、「眞実人体」は、尽十方界であることは未曾聞というべきである。その訳は、十方面はそれぞれ平等であり、その十方面の世界もすべて平等であつて、比べたり対象化することができないからである。また、人体は四大・五蘊から成り立つており、そのままが眞実人体である。

このことは、「尽十方界是箇眞実人体なり」という事實は、凡夫の立場から究尽する事のできない、仏から仏へとこの仏道世界のことだからである。仏道世界において「眞実人体」としてある聖者にはじめて参究し得るものである。また、眞実人体の「学道」における一塵一塵に十方界が備わっているのであつて、学道が無く「学道」を離れた一塵に十方界は包み込まれているわけではない。眞実人体の「学道」によつて十方界を備えた一塵は、一塵のなかに僧堂・仏殿を建立し、この僧堂・仏殿のなかに尽十方界を建立する学道をしているのである。このように、僧堂・仏殿の建立は、眞実人体の学道により建立されているので

あり、建立はこのように学道の処にできているのである。この道理が、「尽十方界是箇眞実人体」である。「学道」を忘れた天然・自然主義の邪見に習つてはいけなうといつてゐる。

「身実人体」の「身学道」も、「山河大地日月星辰、これ心なり」の「心学道」も、「眞実の学道」である「身心学道」でもつて「仏道を学習するに、しばらくふたつあり」として、一つは身を表にした方面の学道を、もう一つは心を表にした方面の学道を示しているのである。いわゆる、仏道に対する身構えや心構えといった見方が、身をもつて学す「身学道」となり、心をもつて学す「心学道」となつてゐるのである。ここでは、「身心学道」の学道が、「仏道を学習する」にあつて、「眞実人体の学道」として示されたものである。

眞実人体の学道

そこで、「身をもつて学する」ことによる「身学道」が「眞実人体の学道」として、十方世界を、どのように究尽しているのだろうか。

分量にあらざれば広狭にあらず。尽十方界は八万四千の說法蘊なり、八万四千の三昧なり、八万四千の陀羅尼なり。八万四千の說法蘊、これ転法輪なるがゆゑに、法輪の転処は互界なり、互時なり。方域なきにあらず、「真人人体」なり。いまのなんぢ、いまのわれ、尽十方界真人人体なる人なり。これらを蹉過することなく学道するなり。(「身心学道」一三六頁)

と、仏道の世界において、「真人人体の学道」は尽十方界である。この尽十方界は全て平等であつて境界を区切つて量るのではないから、世界の広狭をいつているのではない。「仏道を学習する」にあつて、「真人人体の学道」による尽十方界は八万四千の說法の集まりであり、八万四千の諸三昧であり、八万四千の陀羅尼である。尽十方界における八万四千の說法の集まりは、転法輪する処である。それ故、その転法輪は、縦横無尽にあらゆる場所、あらゆる方角の世界全体に広く行き渡り、三世を貫きすべてに行き渡つている。

このように「真人人体の学道」が、尽十方界に行き渡つていくことは、方向や領域がないわけではなく、む

『正法眼蔵』「身心学道」の一考察(神戸)

しろ、そのことこそが「真人人体の学道」であり、「身心学道」の一翼である「身学道」である。不汚染の仏道世界にあつて、「真人の学道」である「身心学道」にある今の汝、今の我が、「尽十方界真人人体」なる人である。このことを、誤ることなく学道することだという。

「真人人体の学道」は、時空をこえて尽十方の全法界に遍く充滿しているのであるが、更に、

三大阿僧祇劫、十三阿僧祇劫、無量阿僧祇劫までも、捨身受身してもてゆく、かならず学道の時節なる進歩退歩学道なり。礼拝問訊するすなはち、動止威儀なり。枯木を画図し、死灰を磨瓢す。(「身心学道」一三七頁)

と、無限に長い時間、捨身受身していくところにこそ、身学道の時節があり、進歩退歩の「真人人体の学道」がある。「仏道を学習する」上で、最も一般的な礼拝問訊の威儀作法も坐禅弁道の威儀作法も、「身学道」における「真人人体の学道」である。しかも「真人人体の学道」は、しばらくの間もとぎれることがない。曆日は光陰矢のごとしで、速やかに過ぎ去つて行くけれども、十方界を究尽する

「尽十方界真実人体」の「学道」は、単に過ぎて行くだけでなく幽遠であるという。

無始無終に途切れることなく、十方界を究尽する「真実人体の学道」は、特別な学道ではなく、礼拝問訊や坐禅行道することが「真実人体の学道」であり、それこそが、「身心学道」における「身心学道」面での時節であるという。それでは、「身学道」における「真実人体」は、現実には、どのようなものであろうか、

「生死去来真実人体」といふは、いはゆる生死は凡夫の流転なりといへども、大聖の所脱なり。超凡越聖せん、これを真実体とするのみにあらず。これに二種七種のしなあれど、究尽するに、面々みな生死なるゆるに恐怖すべきにあらず。（「身心学道」一三七頁）

と述べている。「生死去来が真実人体」である。この生死は凡夫にとっては流転の姿であっても、「真実人体」にある大聖にとっての生死は解脱の姿である。超凡越聖の生死を「真実人体」とするのではなく、凡夫の生死流転も「真実人体」の一面である。生死には二種七種とさまざまな生死があるけれども、生死そのものを究尽してみると、

それらは皆、「真実人体」の生死であるから、少しも恐怖すべき必要はないという。その理由は、

いまだ生をすてざれども、いますでに死をみる。いまだ死をすてざれども、いますでに生をみる。生は死を聖礙するにあらず、死は生を聖礙するにあらず、生死ともに凡夫のしるところにあらず。（「身心学道」一三八頁）

という。生がそのまま死で、死がそのまま生であって、生死は相對しているのではなく生死一如であるから、生は死をさまたげないし、死は生をさまたげるものはない。このような「真実人体」としての生死は、凡夫の生死であつても、生・死ともに凡夫の知るところではないという。

そこで、このような聖礙なき生死こそが「真実人体」であり、身をもって「仏道を学習する」ところの身学道である。また、『身心学道』の巻の劈頭にある南嶽の「修証はなきにあらず、汚染することえじ」という「不汚染の仏道世界」における「身心学道」から、身をもって学す「生死去来真実人体」による学道となるのである。この「生死去来真実人体」による学道を、禪師は「圓悟禪師いはく」と

して、

生也全機現、死也全機現。閻塞太虚空、赤心常片々
(生も全機現なり、死も全機現なり。太虚空に閻塞
し、赤心常に片々たり)。(一三八頁)

と述べている。生と死の全機現は、生は死に対する生では
なく、死は生に対する死ではない。太虚空にそれぞれ充滿
して、全虚空が生となり死となつて生死していることを
「生也全機現、死也全機現」として示している。その生・
死の一念一念における全機現が常に「太虚空(心)」であ
り、「真人人体」である。そこを、しづかに功夫点検すべ
きであるといっている。

この「全機現」について禅師は、『身心学道』の巻が示
衆された同じ年の十二月十七日に、『全機』の巻を著し
「生也全機現、死也全機現」について示衆していること
は、「真人人体の学道」が「全機現」としての「学道」に
あることを示唆しているといえよう。このことは、圓悟禅
師の「生也全機現、死也全機現」には「なほいまだ生死の
全機にあまれることをしらず」としていることから知ら
れる。そこで、禅師は、

『正法眼蔵』「身心学道」の一考察(神戸)

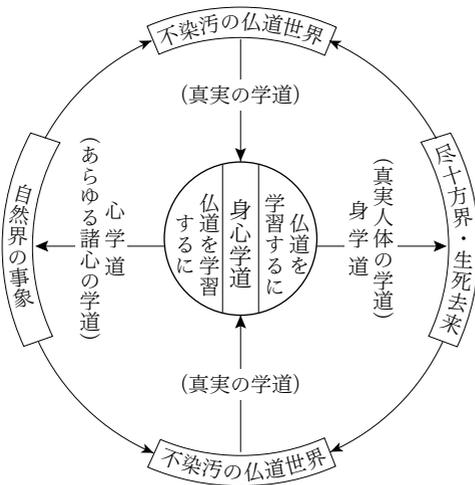
去来を参学するに、去に生死あり、来に生死あり、生
に去来あり、死に去来あり。去来は尽十方界を両翼三
翼として飛去飛来するなり。尽十方界を三足五足とし
て進歩退歩するなり。(身心学道 一三九頁)

と、「生死去来真人人体」の「生死去来」の去来を参学す
るに、去来の去にも生死があり、来にも生死がある。生死
の生にも去来があり、死にも去来があるという。その去来
は尽十方界を両翼三翼として円通自在に飛去飛来し、尽十
方界を三足五足として自由無碍に進歩退歩している。これ
が「真人人体の学道」であるという。

このことは、「真人人体の学道」において、「生死去来真
人人体」の「生死去来」によって、「尽十方界」が自由無
碍に「飛去飛来」して「全機現」することであり、「尽十
方界」が円通自在に「進歩退歩」して「全機現」するとい
うことである。この「全機現」に「身心学道」面における学
道が、「真人人体の学道」であるか否か、真人の学道への
一基準となつていえる。

むすび

以上の考察を踏まえて、「身心学道」の構造内容について大雑把な骨組みを図に示せば、左記のようになるであろう。



ここにおいて、「不染汚の仏道世界」における「真実の学道」としての「身心学道」は、「仏道を学習するに、しばらくふたつあり。いはゆる心をもて学し、身をもて学すなり」というように、心をもつて「仏道を学習する」、「心学道」の面と、身をもつて「仏道を学習する」、「身学道」の面とによる「身心学道」がある。「心学道」の心をもつての学道は、「あらゆる諸心の学道」によって「身心学道」の学道となる。また、「身学道」の身をもつての学道は、「真実人体の学道」によって「身心学道」の学道となるのである。更に、「身心学道」としての「心学道」は、一般にいわれる「三界唯心、法界唯心」といった抽象的なものではなく「山河大地日月星辰、これ心なり」であり、「牆壁瓦礫これ心なり。さらに三界唯心にあらず、法界唯心にあらず、牆壁瓦礫なり」（「身心学道」一三一頁）というように、「自然界の事象」として「心」が具体的に示されている。また、「身心学道」としての「身学道」についても、「尽十方界是箇真実人体なり」であり、「生死去来真実人体」というように、真実の学道における身体は、単なる身体を越えて「尽十方界・生死去来」と一体なる

「真人人体」として示されている。この「真人人体の学道」は、具体的には「礼拝問訊するすなはち、動止威儀なり。枯木を画図し、死灰を磨瓢す。しばらくの間断あらず」（身心学道）（一三七頁）とあり、「学道のさだまれの参究には、坐禅弃道するなり」（坐禅箴）（二二九頁）とあるように、「礼拝問訊」や「坐禅弃道」における「威儀作法」といった仏行の行為、そのものにあるといえる。

このことにより、「心学道」の「山河大地日月星辰、これ心なり」・「牆壁瓦礫これ心なり」の「心」としての「自然界の事象」であることと、一方、「身学道」の「尽十方界是箇真人人体」・「生死去来真人人体」の「真人人体（身）」の「行為」としての「礼拝問訊」・「坐禅弃道」といった仏行行為が、時空を越えた「尽十方界」であり、身近な「生死去来」であることが、共に、「不汚染の仏道世界」に円環的に参入し「真実の学道」としての「身心学道」となっている。そして、また、この「身心学道」が軸となつて「心学道」の方面に全機現し、「身学道」の方面に全機現する。それが、「あらゆる諸心の学道」により「自然界の事象」となり、「真人人体の学道」により「尽十

『正法眼蔵』「身心学道」の一考察（神戸）

方界」・「生死去来」となるというように、心・身の両面に向けて円筒的な広がりとなり、全法界を充滿して行くこととなるのである。

注

- (1) 『正法眼蔵』（二）「坐禅箴」二二六頁。（以下、水野弥穂子校注・岩波文庫本『正法眼蔵』による）。
- (2) 『正法眼蔵』（二）「坐禅箴」二二九頁。
- (3) 同、二三一頁。
- (4) 同、二三八頁。
- (5) 同、二四二頁。
- (6) 坐禅の標準として「自受用三昧」の風光が『弃道話』に示されている。拙稿『弃道話』にみる「自受用三昧」の世界（愛知学院大学短期大学部研究紀要、十三号）参照。
- (7) 『正法眼蔵』「行持」における「行持」考（『閑花集』愛知学院大学短期大学部人間文化学科五十五年記念論集）を参照。
- (8) 『学道用心集』（大久保道舟編『道元禅師全集』春秋社刊）四七七頁。
- (9) 『正法眼蔵』（三）「仏道」四〇頁。
- (10) 『正法眼蔵』（二）「嗣書」三七二頁。
- (11) 『正法眼蔵』（二）「行持」三九二頁。

『正法眼蔵』「身心理学道」の一考察（神戸）

(12) 『学道用心集』（大久保道舟編『道元禪師全集』春秋社刊）四七六頁。

(13) 『学道用心集』（大久保道舟編『道元禪師全集』春秋社刊）四七七頁。

(14) 『正法眼蔵』（一）「弁道話」三四頁。

(15) 『正法眼蔵』（一）「身心理学道」一二七頁。

* 以下、『正法眼蔵』（一）「身心理学道」の本文引用は水野弥穂子校注の岩波文庫本による。本文中に、頁をしめす。

(16) 『正法眼蔵』（四）「発菩提心」一七六頁。

(17) 『正法眼蔵註解全書』巻五、三四五頁。

(18) 『正法眼蔵註解全書』巻五、三四五頁。

(19) 『正法眼蔵』「仏向上事」。大久保道舟編、春秋社刊『道元禪師全集』四六九頁。

(20) 『正法眼蔵』（一）「古仏心」二〇六頁。

(21) 『正法眼蔵』（二）「三界唯心」四九六頁。

(22) 『正法眼蔵註解全書』第五巻、三三〇頁。

(23) 『正法眼蔵』（二）「山水経」二〇四頁。